海外が驚く被爆者の姿勢　日本被団協のノーベル賞が与えるインパクト

2024 年 10 月 19 日

篠田英朗・東京外国語大学教授

「復讐（ふくしゅう）の連鎖」が世界中で続く今こそ、日本被団協がノーベル平和賞を受賞した意味は大きい――。国際政治学者で、広島大学での勤務経験もある**篠田英朗・東京外国語大学教授**（平和構築論）はこう力説する。**日本被団協が世界に示しているメッセージ、そして日本人が考えるべきその意義とは**。

――日本被団協がノーベル平和賞を受賞した意義をどう考えますか。

被爆者の方々は、原爆の惨禍を体験した**戦争被害者**です。**戦争の被害者が、救済の対象にとどまるのではなく、これだけ継続的、体系的に、大規模に草の根の平和運動を続けてきたケースは世界的に例がありません**。

戦争被害者が憎しみだけに走るのではなく、**平和運動家となる姿を世界に示し**ました。これは、**核兵器を使わせなかったことと同じぐらい、意義深いこと**だと思っています。

――どういうことでしょうか。

イスラエルとパレスチナなど、世界各地で**「復讐」が続い**ています。ですが、被爆者は悲惨な経験をしながら、**米国への復讐には向かいません**でした。

むしろ、**その悲惨な経験ゆえに、平和運動に人生を捧げた**のです。今日の国際情勢でこそ、とても意義深く、**その実践は世界に向けたモデル**となるものです。

パレスチナから訪れた行政官が驚く、被爆者の姿

――世界の人に、被爆者の姿はどう映っているのでしょうか。

私は 1999 年から 2013 年まで広島大学の平和科学研究センター（当時）に所属し、広島の戦後復興についても研究しました。

パレスチナなど海外の行政官が広島に視察に来た際に、研修の講師を務めることもよくありました。彼らが必ず聞くのが、「被爆者は米国を恨まないのか」ということでした。

そして、**思い出したくないはずのつらい体験を涙を流しながら証言する姿に、とても驚く**のです。

学者が「被害者も平和運動に向かうことができる」と説いても、当事者には響きません。ですが、**被爆者なら伝わる。原爆の惨禍を繰り返させないという訴えを一つの文化として浸透させた姿が、何よりの実例だから**です。

――被爆者の 80 年近い歩みが、説得力を持つのですね。

ただ、**被爆者がどれだけの苦悩を乗り越えて、平和を叫んでいるのか。そのことを軽視してはいけません。**広島や長崎で、米国への恨みが最初からなかったわけではないのです。何十年も被爆体験を隠して生きてきた後に、語り始めた人も多くいます。

希望を持つに至るまでには、被爆者一人ひとりの人生に根ざした個別のストーリーがあります。そのストーリーは、**世界中で有益な情報**です。日本人はその意義を十分に理解していません。

――被爆者の高齢化が進む中、日本社会も、もっと被爆者の声に耳を傾けないといけませんね。

被爆者の姿は、戦争の悲惨な経験を踏まえて平和を発信するという、戦後日本のあり方にもつながっています。**日本被団協は日本が世界に示すべき思想を代表している存在**だと言えます。日本人は、その功績をもっと認識し、敬意を持ち、誇りに思うべきです。（根津弥）

◇

<しのだ・ひであき>　1968 年生まれ。東京外国語大学教授。多くの紛争後地域を訪れ、調査研究、講演などを行ってきた。著書に「平和構築と法の支配」（大佛次郎論壇賞受賞）、「『国家主権』という思想」「集団的自衛権の思想史」など。